

連載



はじめの一步



第 27 回

看護とアタッチメント②

廣瀬たい子 Hirose Taiko ^{*1}

鈴木香代子 Suzuki Kayoko ^{*2}

三上謙一 Mikami Kenichi ^{*3}

^{*1} 東京有明医療大学看護学部特任教授

^{*2} 同助教

^{*3} 北海道教育大学保健管理センター准教授

はじめに

人間のみならず、子どもが生きていくためには養育者の存在が欠かせません。多くの場合、重要な養育者が母親ですが、必ずしも母親に限らず大人の保護と養育を必要としています。この保護や養育を得るために乳幼児にできることは限られていますが、これらの行動は「愛着(アタッチメント)行動」と呼ばれています。例えば、子どもの呼び声は母親の関心をひきつけ、子どもが移動すると母親の行動を生起させる。つまり接近行動をもたらす子どもの行動を「愛着行動」と呼んでいます。Bowlbyは、この愛着行動をつかさどるものとして以下の反応を指摘しています。泣き(crying)、微笑み(smiling)、後を追う(following)、しがみつき(clinging)、吸う(sucking)の5つと、さらに呼びかけ(calling)です。そして、次のように述べています。「大切な愛着対象が何の懸念なく身近に存在するかぎり、子どもの気持ちは安定する。愛着対象が失われるかもしれないという危険性は、子どもの心を不安にするし、実際に愛着対象が失われると、子どもは悲嘆にくれる。またこのような場合に、子どもが怒りを示すこともある¹⁾」。こうした Bowlby の知見は、アタッチメント分類に大きく貢献しています。

アタッチメントのタイプ

乳幼児の生存には養育者の存在が不可欠ですが、とく

に脅威にさらされたとき、養育者に常時、自分のそばにいてもらい、守ってもらうことが必要です。そのために乳幼児は Bowlby が示した前述の行動を養育者に示し保護してもらうという、きわめて受動的な方法しかもちません。そうした子どもの行動は発達段階に応じて異なりますが、発達が進むにつれてより豊かで巧妙な行動に変化し、養育者をひきつけます。そして子どもが養育者をひきつける行動・方法は、養育者の子どもへの対応方法や行動のとり方によって、つまり子どもと養育者の関係性のあり方によって異なります。毎日、時々刻々の相互作用が関係性を形成します。また、そのような過程で子どもは環境や周囲の人々との相互作用のあり方を学習し、脳神経回路を形成し、社会性を獲得していきます²⁾³⁾。この関係性がまさにアタッチメントであり、その関係性を構成する情動を含めた行動を愛着(アタッチメント)行動といえるでしょう。人間の愛着行動は単一・一律ではなく子どもとその養育者が個別に形成するものですが、基本的に子どもが養育者から守ってもらうために最適な行動を形成していきます。その過程で一般的な愛着行動の枠から外れる行動や、子ども自身の行動や情動を抑制して養育者に好まれるであろう愛着行動を形成する場合もあります。

そのような個別のアタッチメントタイプを分類したのが Ainsworth です。その分類に用いた方法が前回(本誌 2018年2月号)で説明した SSP (Strange Situation Procedure) です(表1)⁴⁾⁵⁾。



表① SSP エピソードの要約

エピソード	人物	時間	出来事の要約
1	子ども, 母親 マネージャー	30秒間	観察者(マネージャー)が観察室に母子を招き入れ, 部屋を出ていく。
2	子ども, 母親	3分間	母親は子どもに遊びを促し, 椅子に座って雑誌を読む。子どもが母親を誘った場合には応じるが積極的にかかわらない。
3	子ども, 母親 ストレンジャー	3分間	ストレンジャーが入室して自己紹介し, 母親に子どもの名前や月齢を訪ねるような, 差しさわりのない会話をする。1分30秒後にドアのノック音が鳴り, ストレンジャーは子どもと遊ぶ。
4	子ども ストレンジャー	3分間	ドアのノック音が鳴り, 母親が部屋を出る。ストレンジャーは子どもと遊びを続けるが, しばらくすると椅子に座る。子どもが泣いている場合には抱き上げてなだめ, 子どもが泣きやまなければ, 30秒経過後母親が入室する(第1分離場面)。
5	子ども, 母親	3分間	母親の入室と交代してストレンジャーは静かに部屋を出る。母親は子どもをなだめたり, 遊び, 椅子に座る(第1再会場面)。
6	子ども	3分間	ドアのノック音が鳴り, 母親は部屋を出る。子どもが泣きやまなければ30秒経過後ストレンジャーが入室する(第2分離場面)。
7	子ども, ストレンジャー	3分間	ストレンジャーが入室。子どもをなだめ, 落ち着いたら椅子に座る。子どもが泣きやまなければ30秒経過後母親が入室する。
8	子ども, 母親	3分間	母親が入室。ストレンジャーは静かに部屋を出る(第2再会場面)。

(Crittenden P : A Guide to the Ainsworth Infant Strange Situation with Expansions & Modifications. Copyright, Patricia Crittenden. 2015./Ainsworth S, Blehar MC, Waters E, et al : Patterns of Attachment : A Psychological Study of the Strange Situation. Psychology Press, New York, 2015, pp 32-37. より引用・改変)

本稿では, Ainsworth によるアタッチメントタイプと, Crittenden が Ainsworth の分類を修正・細分化したタイプを紹介します。

Ainsworth の A・B・C タイプ⁶⁾

A タイプ

- SSP エピソードの, 母親との再会場面(エピソード 5・8)において子どもは, 巧妙に母親への接近や相互作用を回避する。母親が部屋に戻ってきてても無視したり, わずかに喜びを示すのみで, 母親が子どもに対して熱心な接近や再会の親愛行動を示す場合には, とりあえず歓迎するしぐさと回避を織り交ぜた行動を示す。
- 再会場面で母親への接近行動や相互作用, 身体的接触行動をあまり示さない。
- 母親が抱き上げても, 母親に抱きつくことはなく, 抱かれることに抵抗を示す。
- 抱き上げられてきつく抱かれることに抵抗を示すが,

子どもは母親との身体接触や相互作用に応じる。

- ストレンジャーを母親同様に受け入れ, 回避行動をあまり示さない。
- 分離場面で子どもは母親がいないことに対する不安より, 一人取り残されたことに対する不安を示す。ストレンジャーと子どもだけの場面でも不安を示すことがあまりなく, 一人で残されたときにストレンジャーが戻ってくると機嫌がよくなる。

B タイプ

- 子どもは母親への接近や身体的接触, 相互作用を強く望み, 母親との再会場面でそれが強く示される。
- 子どもは母親に抱かれ続けることを望み, 母親から離れることに抵抗を示す。
- 母親との再会場面(エピソード 5・8)において子どもは, 泣いたり, 笑みを浮かべたりしてうれしそうに母親に歩み寄る。
- 母親との身体接触に抵抗を示すことはない。
- 母親との再会場面で母親を回避することはない。

- ストレンジャーに対して親しく接するが、明らかに母親に対する接触や相互作用をより好むことを示す。
- 分離場面(エピソード4・6)で不安を示すことも、示さないこともあるが、不安を示す場合には明らかに母親がいなくなったことが原因であり、一人で残されたことではない。その際、ストレンジャーによって多少なだめられるが、母親を求めていることが明らかに示されている。

Cタイプ

- 子どもは大げさな行動、相互作用、抵抗を示す。とくに第2再会場面(エピソード8)で著しい。
- 子どもは中程度～強度の身体接触を望み、母親から離れようとしなない。
- 子どもは再会場面(エピソード5・8)において母親を回避しない。あるいは、母親から顔をそむけたり、母親を回避する、目をそらすなどの行動を示す。
- 子どもは strange situation において「不適応行動」を示すことが多く、A・Bタイプに比べると怒りやわざとらしい未熟さや非力さを示すことが多い。

以上がタイプ別の愛着行動ですが、一般にAタイプが不安－回避型(anxious-avoidant)、Bタイプが安定型、Cタイプが不安－抵抗ないし両面感情型(anxious-protest, ambivalent)と呼ばれています。さらに Ainsworth はAタイプをA1・A2、BタイプをB1・B2・B3、B4、CタイプはC1・C2に細分化しています。しかし、この3タイプでは分類できず、説明もつかないタイプに気づいた Ainsworth の弟子である Mary Main がDタイプ(disorganized)として、混乱型を指摘しました⁷⁾。このなかでBタイプが健康でもっとも望ましいアタッチメント形成を示しているのですが、A・Cタイプが異常かというところというわけではありません。A・Cタイプであつても正常範囲にある場合には健康な精神発達と人間関係を形成して、幸せな社会生活を送ることができる大人になります。問題となるのは、極度のAタイプ(不安－回避型)、Cタイプ(不安－抵抗ないし両面感情型)、およびDタイプ(混乱型)のアタッチメント形成です。こうした問題のあるアタッチメント形成が進行している親子を早期に発見し、支援介入を行うことで、親子の関

表2) Crittenden のA・B・Cタイプ

1. Bタイプ：身体情報(somatic information)、認知(cognition)、情動(affect)をバランスよく用いている。
2. Aタイプ：認知(cognition)による予測力を過剰に用い、ネガティブな情動(affect)や身体(somatic)情報を抑制して用いない。
3. Cタイプ：誇張したネガティブな情動(affect)や身体(somatic)を用いて、認知(cognition)による予測不能性を無視する。

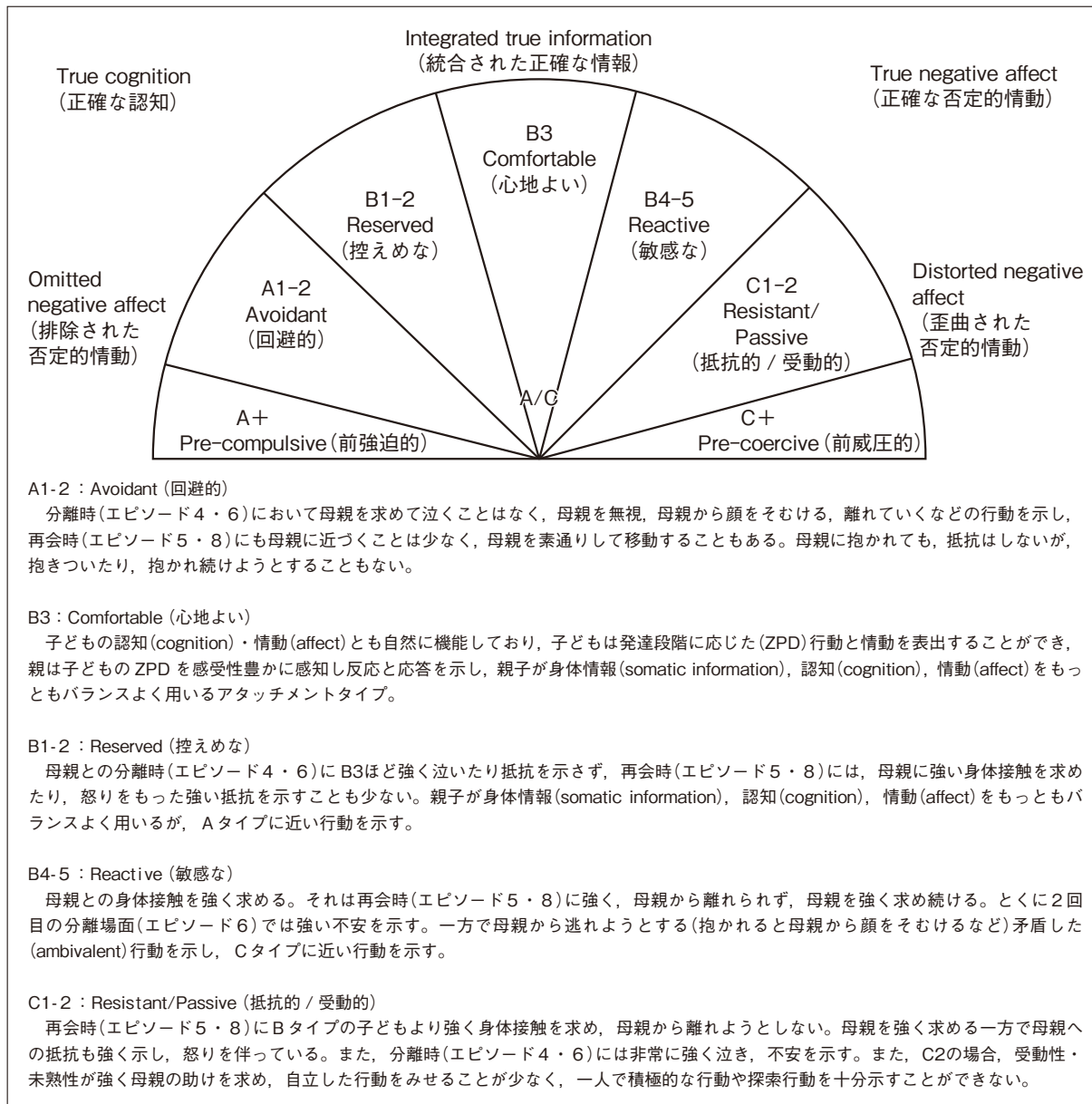
(Crittenden P: A Guide to the Ainsworth Infant Strange Situation with Expansions & Modifications. Copyright, Patricia Crittenden. 2015. より引用)

性の改善、子どもの健やかな発達を促すために考案されたものです。

Ainsworth は、1970年代の裕福な中産階級の母子を対象とした親子関係の観察研究を通してアタッチメント分類法を提唱しました。その当時の中産階級の母親は専業主婦が多く、恵まれた環境で育つ子どもと、子育てに専念している母親の関係性から得られたものでした。

Ainsworth の指導を受けた Crittenden はその後、虐待・ネグレクトの母子に多く接し、虐待・ネグレクトの子育てのなかから生まれる親子の関係性に関心を向け、そのような関係性形成の過程で生まれるアタッチメントの研究を進めました⁸⁾。Crittenden は、アタッチメント形成における親の役割においてもっとも大切なものは子どもの保護による生存の保障と、子ども自身が自分を守り生存できるようにすることであると考え、親はVigotsky がいう zone of proximal development ; ZPD (最近接発達領域)⁹⁾ に応じて子どもの発達を理解し、保護と自立促進をはからなければならないといっています。そのためには発達的変化を遂げる子どもと共に親も変化しなければなりません。もし子どもの発達がうまく進まない場合、親はその遅れに沿った保護と自立促進をはからなければならない。しかし親が子どもの発達を理解できず不適切な要求をすると、子どもは親を理解し、親の行動を予測しながら自分の身体動作(somatic)、認知(cognition)、情動(affect)を表出できません。そこで子どもは自身の意図を親に伝え、自分への関心を親から得るために誇張した極端な行動を示すようになります。一方そのような行動が親の攻撃を挑発したり、親から嫌

図1 Crittendenによるアタッチメント分類



(Crittenden P : Raising Parents : Attachment, Representation, and Treatment. 2nd ed, Routledge, London, 2015, pp 29-36. より引用)

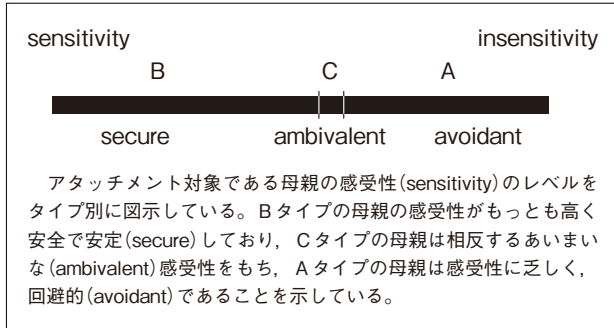
われたり、無視されたりする場合には自分の行動を抑制し、親を不愉快にする情動を示さないなどの方法で親の関心を引き、保護を得られるようにします。このようなゆがんだ親子の関係性が形成され、継続した結果は個人によって異なります。Crittendenはそのような考え方に基づいてアタッチメントタイプを表2⁴⁾のように説明

しています。

表2のA・Cタイプの親に多くみられる行動は以下のようなものです。

- ①子どもの不快な状態にうまく対応して慰め、なだめることができない(反応性の欠如)
- ②子どもに怒りを向けたり、叱ったりする(懲罰的反

図2 母親の乳幼児に対する感受性とアタッチメントの性質



(Crittenden P : A Guide to the Ainsworth Infant Strange Situation with Expansions & Modifications. Copyright, Patricia Crittenden. 2015. より引用)

応)

③楽しさを繕う(泣いている子どもを笑う、ちぐはぐな反応を示す)

さらに説明を加えます。AタイプやCタイプは一般に望ましくないものと考えられ、Bタイプに近づけるための介入方法が考案されていたりしますが、Crittendenは、それは大切な観点を見逃しているといいます。不安定なA・Cタイプのアタッチメントは、乳幼児が親からの保護や養育を獲得し、危害を加えられること・拒否されることを予防するための方法で、親が乳幼児のニーズに対する十分な感受性をもたず、守ってくれない場合に、乳幼児が自分を守り、生き抜くために必要なよい方法なのです。問題は、子どもが親の関心をひきつけ、守ってもらうために発達段階に見合わない極端な行動を示したり、極度に自分のニーズを抑制して親との調和のとれた関係性を形成できないで成長すると、のちに精神/身体と行動、社会性に問題を引き起こすことになるのです。Crittendenは、BタイプやA1-2やC1-2を超える極端なAタイプ(A3-8)やCタイプ(C3-8)、およびA/C

タイプを disorganized タイプとは呼ばず、organized されたアタッチメントタイプであるといっています。つまり、子どもが、感受性に欠け、予測不可能で攻撃的・懲罰的で反応性に欠ける親に適応するために自らの行動・情動を organize してアタッチメント行動を形成した結果であるといっています¹⁰⁾。乳幼児期にはまだ A3 や C3 以上のタイプを形成する行動を表出できるほど発達が進んでいないのですが、その萌芽とみられる行動を表出しています。Crittenden のアタッチメント分類を要約したのが図 1⁸⁾ と図 2⁴⁾ です。アタッチメントは、親子(母子)の両者で形成するものであることから、図 1・2 を用いて説明するとわかりやすい。

今回は、虐待・ネグレクトとアタッチメントについて述べます。

【文献】

- 1) Bowlby J (黒田実郎, 大羽葵, 岡田洋子, 他・訳) : 母子関係の理論 ; I 愛着行動. 岩崎学術出版社, 東京, 1974, p 252.
- 2) Siegel DJ : Mindsight : The new science of personal transformation. Dantam books, New York, 2010, pp 59-63.
- 3) Santrock JW : Life-Span development. 第 8 版, McGrawHill, New York, 2011, pp 110-117.
- 4) Crittenden P : A Guide to the Ainsworth Infant Strange Situation with Expansions & Modifications. Copyright, Patricia Crittenden. 2015.
- 5) Ainsworth S, Blehar MC, Waters E, et al : Patterns of Attachment ; A Psychological Study of the Strange Situation. Psychology Press, New York, 2015, pp 32-37.
- 6) 前掲 5, pp 58-62.
- 7) Granqvist P, Sroufe LA, Dozier M, et al : Disorganized attachment in infancy : A review of the phenomenon and its implications for clinicians and policy-makers. Attach Hum Dev 19(6) : 534-558, 2017.
- 8) Crittenden P : Raising Parents : Attachment, Representation, and Treatment. 2nd ed, Routledge, London, 2015, pp 29-36.
- 9) 前掲 3, pp 220-223.
- 10) Shah PE, Fonagy P, Strathearn L : Is attachment transmitted across generations? The plot thickens. Clin Child Psychol Psychiatry 15(3) : 329-345, 2010.